

# 「統合」と「分離」としての道徳学習

## —ルーマンの社会システム論を手がかりに—

教育デザインコース 教育学領域

劉 博昊

### 1. 目的

「徳目主義」にせよ、それに抗するために持ち出した子ども主体性を唱える一連の新たな道徳教育にせよ、従来の道徳教育は、教師が何らかの手段で価値規範を生徒たちに自覚させることを通じて道徳的に理想な人間を作り上げることを重要視してきたといえよう。だが、政治システム、経済システムなどに分化した現代の社会において、人間の生も政治、経済などの領域にそれぞれ分節化し、道徳教育は教育の領域における「生徒」という人格に対する営為にもっぱらなりかねない。さらに、学校と家庭教育の連動や「新学力観」と相まって、「生徒」という人格はこれまで以上に拡大し、固定化する動きがある。となると、道徳教育を行えば行こうほど、生徒の内面に響き渡らなくなるというパラドックスに陥ると考えられる。

本研究では、生徒が「偽りの自己」の仮面を外し、教師と仲間とありのままに接することを重視する、「全人格的統合」を目指す主体的な道徳学習の構築を試みたい。

### 2. 方法

分析的な道具として、ルーマンの社会システム論を用いたい。また仮説を帰納的に実証するため、東京都大田区立小学校の元教員、山崎隆夫の道徳学習の実践に照準を当てることにする。そこで、実践から見えにくい部分を山崎隆夫への構造的インタビューを実施することによって補うことにする。

### 3. 結果

「道徳で『これを教えよう』というのがあんまり明確ではないかもしれないね」、「負の部分の中で抱え込めるようにしてあげたい」といった山崎の発話にも端的に表れているように、授業の中で枠組みを設けないこと、さらに「人を殺したい」との気持ちを抱えている子どもも含めてあらゆる子どもの存在を承認することが山崎隆夫実践の特質であることが、実践分析やインタビューのデータ分析を通じて分かった。この事態をルーマンの理論に依拠して表現すれば、「教師」という人格との分離と言えるのではないか。また、常識から「逸脱」する子どもが変容しつつある姿も明らかになった。それは問題行動の減少からだけでなく、学びの主体性の甦り及び学級全体の信頼関係の構築からも看取することができる。それは「生徒」の人格に覆い尽くされていた、他のシステムに分節化していた人格の、学校という場での統合として理解することができよう。

### 4. 考察

以上の議論をまとめれば、従来の「教師」の人格と分離し、教師—生徒間、及び生徒同士の人格的信頼関係を築くことは「全人格的統合」を促し、裏返して、「全人格的統合」もまた信頼関係を確保する。こうした分離と統合の相互補完性こそ、本研究の提唱したい道徳学習の中核である。また、教師が立て続けに分離すべきことは言うまでもない。